慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	阿壠「南京」とその問題点 : 阿壠の文学史上の位置付のために
Sub Title	Some issues on Nanjing by A Long
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.77- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

阿壠「南京」とその問題点

——阿壠の文学史上の位置付のために——

関根　謙

序

阿壠（一九〇七—一九六七）という名前は今までの中国現代文学史のなかでほとんど取り上げられていなかった。しかしそれはこの文学者が取るに足らない無能な人物であったからではない。魯迅の死の直後から開始された複雑な政治的文学的関係のなかで抹殺され続けてきたからである。私はここで阿壠の代表作『南京』を取り上げ彼の業績の一端を確認したうえで、その数奇な人生について現在知り得ることをまとめ、阿壠の文学史上の位置付けの基礎としたい。

『南京』は一九三九年十月に書き上げられた特異な戦争文学である。しかしこの書が原題を『南京血祭』と改められ正式に出版されたのは一九八七年十二月のことであった。なんと半世紀を経て初めて日の目を見たのである。北京の人民文学出版社の刊行である。原題の『南京』を『南京血祭』と変えたのは、阿壠の親友で詩人の緑原（同氏に私は北京で直接お会いし助言を受けた）によると、『南京』という題名だけでは単なる観光案内か地理書と間違えられそうだったからだそうだ。緑原はこの書刊行の際の編集委員であり、この書の「序」は彼によるものである。これは阿壠という名

前が、中国文壇のなかでいかに忘れ去られていたかを物語るエピソードだと言える。だがこの『南京』は一九四〇年の中華全国文芸界抗敵協会『抗戦文芸』において第一位に入選した作品であり、当時の文壇の話題作だったのである。阿壠の作品と前後して、日本軍による南京虐殺事件をテーマにした作品がいくつか発表されていたが、長編の作品はこれが最初であった。この作品は南京の戦いを中国人の立場から初めてまとめたものなのである。阿壠は中央軍官学校出身の少尉小隊長として一九三七年八月の上海戦に従軍し、重傷を負って前線を離脱した後延安に渡り抗日軍政大学に学んだが、演習中に再び負傷し西安で療養生活を送った。この作品は療養中の西安で自らの経験と見聞をもとに書き上げたものである。この時期に国民党と共産党の間を渡り歩きながら作品に取り組んだということ自体、あまりにも大きな意義を持つものであろうと私は思う。

なお、本論は人民文学出版社の『南京血祭』をもとにしているが、人民文学出版社の編集委員会は原作の書名を『南京血祭』と変えたばかりでなく、文面においても編集委員会の判断で変えてある箇所があると明言しており、これが阿壠の純粋な原作とは言いきれない弱点を持っている。

一

『南京』は九つの章と「尾声」からなっている。これは一九三七年初冬から十二月二十日までの南京を、多くの登場人物を交差させ、時間的な経過を追いながら描いた作品である。次に各章の主な内容をまとめておく。

第一章・五小節からなる。一九三七年初冬の南京。通信小隊長厳龍、市民たち、ある老婆とその孫、軍事教練中の青年学生兵、仏教徒鐘玉龍、スラム街の人々など当時南京に生活していた中国人が日本軍の猛爆撃のなかで何を目にし、

何を考えていたか、そしてその運命はいかなるものであったかを描く。侵略者への怒りをこめた凄惨極まりない爆撃の描写。文化と破壊、青年の夢と犠牲、宗教と現実、人間とは何か、中国の運命と方向は何かについての阿壠の思い。

第二章・四小節からなる。十一月末から十二月初め、日本軍の南京侵入を目前にし南京から撤退していかなければならない市民の姿を描く。厳龍の友人歩兵少尉袁唐、憲兵少尉曾広栄、第五中隊少尉関小陶など自らの手で愛する南京を破壊しなければならなくなった知識人出身の青年将校の悲痛な思い。焼山芋売りの寡婦、一人暮らしの老女、私塾の老先生など頑固に撤退を拒否している人々に対する説得工作。空き家に忍びこんで盗みを働く中国兵。青年将校らの抗日戦争と自らの犠牲、および阿Q相に関する論争。

第三章・二小節からなり、第一小節では南京の地形と歴史について美しく展開している。それぞれの場所の現時点における防御体制についても詳しく説明している。第二小節では南京の中国軍の最高首脳会議の模様を再現し、「最高統帥」の煽動的な演説から首都南京防衛軍司令長官唐生智が誕生するまでと唐生智の野心を描く。兵力や地形、防衛ラインの建設など万全の準備を整えながらも、決定的な弱点を内在している防衛体制が読み取れる。ともかく、南京は防衛体制を完成した。

第四章・二小節からなる。十二月五日の九華山守備隊の奮戦。某連隊歩兵第二大隊第六中隊隊長で歴戦の古強者張涵と付属重機関銃小隊隊長で学生出身の王煜英の心の交流。中国の将兵の英雄的な戦いぶりと日本軍の大部隊がそれを微塵に粉砕していく凄惨な戦闘の様を力強く描く。

第五章・二小節からなる。淳化鎮の王耀武部隊砲兵陣地での戦闘から南京外側の防衛ラインが全面的に突破される中で已むを得ず陣地を放棄するまでを描く。十二月七日の必死の防衛戦で農民出身の砲兵趙仁寿などがお互いの確執を乗

り越えて勇敢に戦い、肉弾戦において遂に日本軍の陣地占領を阻止した。しかし、日本軍はどんどん進んで行く。

第六章・四小節からなる。十二月九日、外側の防衛ラインを突破されて南京城内に後退した中国軍の状況。光華門の袁唐小隊長、紫金山の関小陶少尉、教導隊の曾広栄少尉の奮戦。浮き足立った中国兵をまとめる努力と、間近に迫った圧倒的な日本軍。

第七章・三小節からなる。この章は阿壠の戦死した同窓生黄徳美など三名に捧げられている。黄徳美は華僑の知識人出身であった。十二月十一日、牛首山、雨花台の激戦。ここでは混乱しはじめた中国軍の姿と、そのなかで戦いを堅持した人々の姿を生き生きと描いている。臆病な農民の無知が日本軍を雨花台へ導いてしまったという逸話と農民出身の中国兵たちの見境のない敗退ぶり。このような中国の風土に根ざした状況に対する作者の痛恨の思いと大混乱のなかで輝く戦友たちへの賛歌。

第八章・三小節からなる。十二月十一日、十二日の南京城内の全面的な混乱。長江に逃れ出ようとして中山北路、新街口から挹江門に殺到する人々とそれを阻止する中国軍守備兵の凄惨な小ぜり合い、軽戦車まで繰りだし、手榴弾を投げ付けて同胞を蹴散らし逃げだそうとする中国軍の姿。混乱のなかで同胞によって殺される人々。長江渡し場で船を求めてあがく軍人や市民のいくつかの逸話。十二日夜、憲兵少尉蔡子暢が小隊を率いて渡江脱出した際の状況。作者はここに中国の戦争と中国人、中国軍の運命を象徴している。なおここでも張涵、関小陶、袁唐など最後の戦いを挑む人々の姿も描かれており、実戦を経て大きく変化した厳龍の姿勢にも触れている。

第九章・四小節からなる。十二月十三日、南京の陥落の当日から翌日までの状況を四つの角度から描く。第一は日本に投降した二人の兵士の運命。第二は力強く変化した厳龍の徐州部隊への戦いの旅。第三は渡江における張涵の最後の

戦いと日本の小さな敗北。第四は死体処理場の老儒者と最下層の中国人、ある日本兵の奇妙な感情の交流。そして涙を流す日本人の描写で終わる。

尾声・三小節からなる。脱出に成功した上級将校が敗残の中国兵を掻き集めて撫湖に進撃し、これを奪還することを描く。この寄せ集めの軍団はただ怒りだけで集結したのだが、道々日本軍をつぎつぎと打ち破り、人々から「鉄軍」と呼ばれた。こうして十二月八日に陥落した撫湖は十二月二十日に奪還された。

この他に、阿壠の「前言」(『南京血祭』では編集上これを「後記」として全体の最後においている。)が付されており、全体としては約三五〇枚十四万字におよぶ長編の作品である。

まず、この作品がいかなるジャンルに属するものであるかを確認したい。阿壠はこの「前言」において、次のように述べている。(以下の本文における引用はすべて拙訳によるものである。)

> ここには(『南京』には)真実の話と、他から持ってきた真実の話があり、かなりルポルタージュ(報告文学)に似ている。しかしここには虚構の物語もあるのだ。とりわけ、資料の収拾が極めて困難で、真実の話は輪郭だけということが往々にしてあり、私がそれに色を塗り、血肉をつけ、一つの構想にまとめざるを得なかった。これはまるで小説の方法だ。こうして私はこれをルポルタージュとすることも小説とすることもできなかった。

ここから阿壠がこの問題について自分自身かなり悩んでいたことがわかるが、作者の意図としては、真実を伝える「ルポルタージュ」に重きを置いていたことが伺える。しかし阿壠の文学の師であり、その後一貫して運命的な盟友であった胡風は「リアリズムの精神を把握し、主観の激動のままフィクションに走らないように」と繰り返し注意を与え

ていたという。全体として非ルポルタージュ的な傾向が明らかだったのである。緑原は『南京血祭』の「序」において、次のように指摘している。「少なくともこれ(『南京』)は小説ともルポルタージュとも言えない印象を人に与える。これは怒りに駆られた詩人が猛烈な勢いで筆を走らせ書き上げたものである。別な観点から言えば、この作品において、個人の主観的な情緒が小説にとって不可欠であるはずのリアリズムの精神をかなり抑えてしまっているのである。」詩人としての阿壠については本論で詳しく述べる余裕がないが、この指摘は阿壠の文学の本質をついている。このように複雑な問題であるので、人民文学出版社はとりあえずこれをルポルタージュ風長編小説(報告文学体長編小説)としている。いずれにしても、これを長編小説としてみることも、長編ルポルタージュとしてみることも、そしてこのふたつの混合したものとみることも難しい。何よりも、一貫した「長編」とすることにそもそもの無理があると言える。それは主要な登場人物の関連性がきわめて薄く、章によっては完全に独立してしまっているからである。

この作品の登場人物を大きく分けると四つの群像を見ることができる。第一は厳龍(第一、九章)袁唐と曾広栄(第二、六、八章)ら学生知識人出身の青年将校。第二は張涵(第四、八、九章)を中心とした農民出身の将兵。ここには第四、五、八章の兵隊たちが含まれる。第三は描写は少ないものの、中国軍の最高首脳、上級将校(第三章)の群像であり、「尾声」における「将軍」もこのグループと見られる。第四は一般の市民農民の群像(第一、二、七、八、九章、尾声)である。阿壠は中間的な人物や縁故を持ってきて、これらの登場人物を結び付ける努力をしているが、残念ながら必然性が読み取れない。そしてこの他に、独立性の強い章として第三、五、七章と尾声をあげることができる。このようにこの作品ではある特定の登場人物を絞りこむことができないのである。ただ最初に述べたように「時間的経過」の観点から言うとこれらに若干の一貫性を認められるが、これもやはり決定的な要素とは見做すことができない。つまりこの作品

はいくつかの短篇と中編の集合体なのである。そしてこの集合の結合剤となっているのは、「南京の陥落」に対する作者の怒りをもとにした複雑な思いである。阿壠は次のように言っている。

しかしこの本で私は、そのようなこと(ある主要な登場人物を決めること)ができなかった。南京の戦いでは、一つの角度から、そしてそれぞれの分野から、その全貌を描かねばならなかったからだ。しかも事実として、抗日戦争はけっしてあるひとりの英雄の業績ではなく、少数の人間の壮烈な行為でもない。それは全民族、中国人民全体のもので、ひとりひとりの将兵の血肉のなかに内在するものなのだ。私には、ひとりあるいは数人の英雄を作り上げることはできない。歩兵も彼であり、砲兵も彼であり、淳化鎮の戦いにも彼がいたし、雨花台の戦いにも彼がいて、渡し場の守備兵にも、渡河の兵士にも、そして戦車との肉弾戦にも彼がいたではないか。

それでは私の作品の情感を支離滅裂にしてしまえばいいのか。……それもできない！　どうすべきか。私は人物によって小説の情感を一貫させるという技法を放棄し、逆に事件によって、戦争によってこの情感を貫いて、この小説のまとまりを探った。これはしかし私の向こう見ずな試みに過ぎない。(阿壠「前言」)

体裁の面からも、この一貫性の欠如がかなりはっきり認められる。第一と第三の群像についてはほとんど完全な「小説」であるし、第二と第四の群像はかなり「小説」の要素の強い「ルポルタージュ」と言えよう。しかしこの作品をとりあえず一個の「小説」としているのは、第一の群像の描写が非常に強烈であるためであり、ここに作者の主要な情感が込められているからである。また一つの本の出版という観点から見ると、この一貫性の欠如の問題についても一九八六年の最終的な編集において複雑で困難な要素がなかったとは思えない。後に詳しく述べるが、これは作者の死後(阿壠は一九六七年に獄死)二〇年を経ての出版であり、生前にこの作品の手直しを作者が行なえるような状況でなかった

ので、このような初歩的な問題を解決できないまま出版せざるを得なかったのである。だからそれぞれの群像の持つ強烈な印象が原初的なまま強引に一つの作品としてまとめられてしまったのだ。こうした弱点を持ちながらも、読者に対して訴え掛けてくる阿壠の思いは些かも損なわれていない。ここに私は二重の意味で作者阿壠の無念を感じる。

次にこの作品の主題について述べる。大きく作品全体に網をかぶせたテーマとしては、南京事件を頂点とする日本の侵略に対する民族的な怒りがあげられるが、この作品は単純に日本の残虐な侵略を告発し日本軍国主義を批判する作品ではない。もちろん日本軍の残虐性については鋭く描かれているが、それ以上にこの作品は南京戦に直面した中国人の生き方を徹底的に描き、そのなかから明日の抗日戦争の力を導きだそうとしているのである。国共合作が破れ優勢な日本軍の攻勢のさなかにあって、阿壠は中国の勝利を確信し、この作品を通じて明日からの新たな戦いを呼び掛けているのだ。この主題を中心にして、それぞれ独立した群像に対し少しずつ違ったテーマが与えられている。

第一の青年知識人の物語は、抗日戦争の意義を前途ある中国の青年の立場から考えたもので、自分の青春のすべてを犠牲にしなければ勝利できないという冷厳な事実を主題にしている。そして中国特有の悲観論や楽観論、享楽主義や阿Q主義を現実のものとして認めたうえで、こういう一切の誤謬が残虐苛酷な南京戦のなかで検証され、一人一人の青年が自らの弱点をのり越え、悲痛な思いを心の奥に畳み込んで大きく成長していく姿を生き生きと描いている。

第二の圧倒的多数である農民出身の将兵の物語では、伝統的な中国人の忌むべき性格と中国の軍隊の実状を冷静に描き、ぎりぎりの土壇場でなければ発揮されない中国人の物凄い迫力を主題にしている。南京の戦いは民族の存続を賭けた土壇場に彼らを追い込んだのである。しかし多くの場合、その迫力の発揮はあまりにも遅く、むやみに多くの犠牲を伴うものであった。しかも伝統的な行動様式にしたがって、この最後の力さえ出し切れず悲惨な最期を遂げるものもあ

まりにも多かったのである。阿壠は容赦なくこの暗黒を切り開いている。

第三の中国軍最高首脳、上級将校の物語は第三章と「尾声」の二箇所にあるものだが、きわめて対照的な上級将校の姿が描かれている。前者は彼らの腐敗と野心を冷ややかに描くもので、後者は民族的な怒りに燃えた将軍の英雄像が主題となる。しかしこの物語はページ数も少なく唐突な感じがして描写に失敗している。

第四の市民農民の物語は、彼らが残虐な南京戦の最多数を占める犠牲者として生命財産、そして夢や希望の一切を奪われていくことが主題となっている。これはいくつもの関連性のない逸話の集成であるが、さまざまな角度から「犠牲」の真相を力をこめて描いたものである。特に第一、第二章の人物像は凄まじい迫力があり、侵略戦争の犯罪性が作者の悲痛な叫びと共に伝わってくるような高い完成度を持っている。

『南京』の概要は以上である。次にこの作品の中からいくつかの問題を提起し、阿壠の文学の理解を深めたい。

二

この作品の中から当面三つの問題を論じたい。それは第一に阿壠に見る中国の現状認識について、第二に『南京』の虚構性について、第三に創作と出版の背景についての三つである。

第一の阿壠に見る中国の現状認識についてであるが、第一章の中で空襲警報のサイレン音を描写した次のような散文詩的とも言える一節があるので、まずこれを見てみよう。

この音はいったいなんなのだ。

それは、吹雪の日、飢えた狼が食物を求めて吠えている声だ。低く抑えてずっと遠くから起こり、そして急に高まり、大空を荒れ狂って駆けめぐっていく。そして己れの欝屈、貪婪、残酷をあらわにして空漠たる原野に鳴り渡り、低く低く沈んでいく。もの寂しく絶望的な余韻と瀕死の苦悩の鼻音が、いつまでも耳の底に残っている。しかし次の瞬間、それはまた威嚇するような響きを帯びて吠えはじめる。神を叱責し、生命を叱責し、そして一切を叱責して人類を戦慄させ、地上に不安を播き散らすのだ。

この音はまた、古代の恐竜の絶叫でもある。地層が崩れたとき、あるものは、火山に焼かれて身体中を炎に包まれた。彼は考えも及ばぬ遠い所を目指して、大きな岩を一つ一つ飛び越しては逃げながら、爪で自分を引き裂き、牙で自分に噛みついた。そして、憂愁、恐怖、憤怒や辛辣な感情に惑乱されて、真っ青な虚無の大空に助けを乞う叫び声をあげた。あるものは、不安に轟く海の波に巻き込まれた。そして打ち衝けるような強い力に窒息させられながら、自分の岸辺と大陸を見つめた。自分の位置へ、今までの平和と自由の生活へ戻ろうとして本能的に泳ぎはじめたが、水はその手に流れ来てはたちまち流れ去り、巨大な体のどこにも力の入れようがなかった。波は彼よりももっと大きな拳士だった。それはゴムマリのように彼をもてあそんだ。空に投げあげたかと思うと、固い地面に落とし、捉まえては打ち、押さえつけた。恐竜の剛健な力はここでは逆に疲労の蓄積と変わり、その口もすでに幾度も水中に没した。もはや海に沈むしかなかった。このとき彼はもう一度海面に首を突き出し、最期の声をあげて時間と空間に向かい訴えかけた。世界はこんなに平静に、この巨大な生物が、世界の末日の到来以前に絶滅していくのを眺めているのか、と。あるものは、体には何の災難も受けなかったが、この変異に激しく怒りその爪を高くあげて、大風によって吹き飛ばされてきた岩と、地の裂目から噴き出してきた溶岩に襲いかかった。もう後には退けなかったし、退こうとも思わなかった。そして両目を血走らせ、荒々しい柱状の熱い鼻息を吹き、鋭い牙をむきだして、やけに重い尻尾を振り立てた。挑戦しなければならなかった。そして格闘しなければならなかった。彼は歴史を、自分と仲間の歴史を決定しようとした。こうして続けざまに幾度も、大きく轟き渡る雄叫をあげた。

このときのサイレンとは、このようなものではなかったか。

ここには阿壠の鋭い現状認識が表れている。「古代の恐龍」とは紛れもなく中国であり、長い歴史と広大な国土人民を持った祖国が、白日のもとで絶滅の危機に喘いでいる姿を阿壠は瀕死の恐龍に託しているのである。大きな歴史の潮流のなかで中国の命運はほとんど絶望的であるが、やはり自分自身の手で「歴史を決定」するために「響き渡る雄叫をあげ」ざるを得ない。自己の人間の証明として、このことは絶対にやらなければならないことなのだ。しかし、この「雄叫」が勝利に結び付くか否かは、この一節の中からは見えてこない。いや、どのようなものであっても「古代の恐龍」の絶望的な状況を変革できるとは思えないと言ったほうが正確である。だがどうあっても彼らは叫ばずにはいられないし、叫び続けなければいけないのだ。この暗黒の認識が阿壠の心の底の中国像なのである。この一節が第一章の最後に置かれていることの意義は大きい。つまりこのような絶望的な感覚が全体を支配する情緒となっているからである。そして阿壠の戦いの呼び声はここから発せられているのだ。

しかし、問題はこんなに簡単ではない。阿壠はその「前言」の冒頭において毛沢東の「持久戦論」に対する熱狂的な確信を表明しているのである。

> 軍事的要素あるいは経済的要素、政治的要素のどこから見ても、持久戦というこの理論は、すでに金字塔のように確立している。これには歴史的不朽性があり、prometheus 的偉大さがある。敗北主義は消え残る霧であり、この理論は日光だ。敗北主義は月を眺めては喘ぐ牛に過ぎないが、この理論は客観的存在の必然性をしっかりとつかんでいる。……勝利の曙光はほのかに中国の軍旗を照らしはじめている。これらはみな鉄のように有力な事実だ。

この勝利の確信と前述の現状認識の間には大きな隔たりがある。作品のなかで勝利への展望を基礎に描いているのは

「尾声」だけで、この他の章段では、目覚めた中国人の民族的な気迫と第九章の日本人の倫理的な敗北が、かすかに展望を与えてくれているに過ぎない。しかも「尾声」の描写はあまりにも唐突で上滑りになりすぎ説得力がない。別な言い方をすれば、南京戦を通して中国人の悲痛な現状を徹底的に描く部分は高く評価されるが、勝利への方向はロマンチックな夢に終わっているということだ。しかし、現実から見いだした確信については、説得力のある描写をしている。これは阿壠の最低限の希望といってもいい。つまり、たとえどのように残虐な状況のもとであっても中国は戦いを捨てないという、阿壠の最低限の希望だけは、悲痛な現状の描写の隅から光を読者に発しているのである。そして阿壠文学の価値は、このきわめてかすかな光を自覚しつつ、鋭い現状認識に基づいて悲惨な現実を徹底的に描写することにある。「金字塔」のような理論に基づいて現実から勝利の道を導きだすことにあるのではない。しかし、このような現状からの鋭い認識と、理論への「確信」が当時の作者のなかに同時に存在し、しかも同じ作品のなかでこのふたつの方向からの描写が関連性を持たずに現われ、結果において成功と失敗がはっきり別れたという事実は注目に値すると思う。

第二の問題点は作品の虐構性についてである。前述のようにこの作品にはルポルタージュとしてフィクションに走りすぎるという批判があったが、緑原の「序」にはこの作品が当時出版できなかった理由として「あまりにも真実過ぎる」ということがあったと書かれている。同氏が私に語ってくれた所によると、「あまりにも真実過ぎる」ということは、「戦闘の場面や死体の状況などの残酷さと爆撃の悲惨さが、抗日戦争を継続するうえで中国人の戦意を阻喪させる」ということだったらしい。この評価の分裂は、第一の問題と密接に関連するものである。

このような分裂した評価が可能なのは、言うまでもなく、作品自体が一貫した統一体ではないからである。フィクション性が強すぎるという批判は、二つの方向を指していると思われる。その一つは、第三の群像である上級将校の描

写、あるいは勝利の確信を指し示した部分に対してであろう。この部分は現実から遊離していて、たしかに作りものの粗雑さが見えすぎるのである。これは第一の問題のなかで明らかである。もう一つは、第一の群像である青年知識人の描写についてである。これがかなり高度な小説性を持っていることは間違いないのだが、批判の対象になり得るかということについては疑問である。阿壠はその『詩と現実』の中で次のように述べている。

このような誇張した芸術の完成は、「真実」の情緒を前提として初めて保証される。そしてこれによって成り立っているからこそ、この芸術はその反発作用として有効かつ充分に「真実」の情緒を保証するのである。情緒における「真実」とは、ある情緒の突出のことである。それは高揚して燃え上がるものではなく、集中して先鋭化するものなのである。(「誇張片論」より)

阿壠は「事実」を羅列することが「真実」になるとは思っていない。「真実の情緒」を前提とするならば、現実には存在しないある人物を創造することが、かえって南京戦に直面した中国の「真実」を正しく伝えることになると思っていたのである。ジャンルについての引用からもわかるように、もしこのような創作態度がなかったならば、そもそもこの『南京』は生まれなかった。具体的な批判がどこに対して行なわれたのか、現在私は確認できないので、はっきりしたことが言えないけれども、阿壠はこの部分に対する批判に対しては明確に反論したに違いない。そして阿壠のこの「真実の情緒」という観点から考えると、第三の群像や勝利の方向の描写が失敗していることは、取りも直さず、ここには彼の「真実」がなかったことになるのである。

次に「あまりにも真実過ぎる」という批判については、阿壠のみならず、良心的な中国の作家であったなら、だれも

返す言葉がなかったと思う。これは完全に政治レベルの問題であり、文学論の範疇に入らないからである。そして「真実過ぎる」という批判は、阿壠にとっては成功の裏付けに過ぎず、批判になり得なかったに違いない。ただ、中国においては、このような政治的な発想のない作家は目の目が見られないのだ。問題は阿壠が意識してか、無知からか、この冷厳な事実を拒否したことにある。ここに私は阿壠の文学者としての良心を確認できると思う。

最後に創作と出版の背景について説明したい。阿壠の前言によると、日本の石川達三と火野葦平のルポルタージュが、特に火野葦平の『麦と兵隊』が彼の創作意欲をかき起てたものだったという。阿壠は日本人の鹿地亘、池田幸子夫婦と交流があり、ここから火野葦平の新作の話を聞いたのだが、この作品が杭州湾から除州への進撃をテーマとし、十六万字というかなりの分量を持ち、作者が通信兵として「一発撃っては一筆書き継ぐ」という創作態度を堅持していたということが彼を驚かした。彼はこの火野葦平の作品の内容の如何を問わず、これが「中国の作品と作者を凌駕するものだ」と認めざるを得なかった。そして恥じた。

私は恥じた。自分自身を、そして中国人としての自分を。

私は恥じた。しかし執筆者の立場から恥じたのではない。たしかに私はルポルタージュを書いたことがあったが、私は銃を持つ人間として、まだ完全に銃を下ろしていない人間の立場から恥じたのだ。

そして慚愧の後に憤怒がやってきた。

私は信じられない。「偉大な作品」が中国に生まれず、日本に出現したということを。そしてそれが抗日戦争に生まれず、侵略戦争に出現したということを、分量と創作態度のことも、私を非常に不快にした。

恥辱だ！

緑原によると阿壠は『麦と兵隊』を読んだということだったが、「前言」の中にはその記述はない。しかしいずれにしても、阿壠が日本の従軍文学者の姿勢から強烈な刺激を受けていたことは興味深い。そして阿壠はここから自己の創作の姿勢を改めて確認し、単なる文学者としてではなく戦闘を続ける人間として『南京』に取り組んだのだった。彼にとって執筆は一種の戦闘だった。執筆開始から完成まで二か月ぐらいしかかっていないし、早いものは一日で書き上げている。この猛烈なスピードに阿壠の強い決意が感じられる。日本人との関係でもう一つ指摘したいのは、この鹿地、池田夫妻との親交や胡風との関係を通して、阿壠が日本に対する理解を深めていたらしいということである。この日本に対する理解が、この作品に単純な日本攻撃の「南京事件批判」とは違う性格をもたらしている。この作品の中には残虐な日本侵略者の類型的な描写は一箇所もない。阿壠は日本兵の人間的な側面に注目し、倫理的に自ら敗れていく様を描いているのである。これは、この作品が書かれた前年、一九三八年に文芸雑誌『七月』に発表された彼のいくつかのルポルタージュの中にも認められる傾向である。

この作品の出版の背景として残る疑問は、この作品の原作についてである。前述のようにこの作品は三五〇枚十四万字であるが、緑原は原作が「三十万字」あったと書いている。これは阿壠の死後二十年、作品の完成後五十年を経ての出版であるから、原作の半分が紛失してしまったということなのであろうか。それとも、何か別のことがそこには書かれていて、なんらかの事情でどうしても発表できなかったということなのだろうか。あるいははじめから「三十万字」という数字が間違っていたのだろうか。今、まだこれについての明確な答えはない。

この他、阿壠の文体と言葉の感覚について述べたかったのだが、紙数の都合で、次の機会に回すことにする。

三

阿壠の伝記は書かれていない。その名誉回復(一九八〇年)以後何人かの友人の書いた阿壠についての回想ぐらいしかないのである。しかしとりあえず、不明な点はそのままにして阿壠という文学者の横顔を描こうと思う。

阿壠の人生は五つの時期に分けられる。それは(1)二〇歳代前半の一九三二年頃まで、(2)二〇歳代後半から一九三九年まで、(3)以後新中国成立までの十年間、(4)一九四九年から逮捕された一九五五年まで、(5)獄死する一九六七年までの十二年間、という五つの時期である。

(1)は阿壠の少年から青年にかけての時期である。一九〇七年二月、阿壠は杭州郊外の普通の家庭に生まれた。本名は陳守梅。陳家の詳しいことはわからないが、貧しい家庭だった。しかし、最低限の教育は受けることができた。郷里で私塾に通い伝統的な詩文を学んだのである。その後、経済的な事情と父の強い希望でこの私塾を続けることができず、家業の手伝いなどの労働に追われることとなったが、阿壠はこの私塾で伝統的な詩の美しさを発見し、これに魅了された。そして私塾を辞めた後も、独学で詩作の勉強を続けた。やがて阿壠の故郷を離れるときがくる。一九二五年、阿壠十八歳の時、親戚の紹介で杭州の絹織物商店に「学徒」として勤めることになったのである。「学徒」とは技術を教えてもらいながら年季奉公をする徒弟であり、学生のことではない。ここで彼は二年ほど仕事をしたらしい。しかしこの店は猛烈なインフレのために倒産し、彼の独立の甘い夢は簡単につぶされてしまった。新しい道を探すにも父の承諾が必要だった。阿壠にとって、家や父という存在は絶対のものだったのである。彼は独立の道の前に立ち、家と生活そして自分の芸術への夢の矛盾に苦しみぬいた。この苦しみの日々にも詩作は休みなく続けられ、やがて阿壠はその旧

体詩を杭州の新聞に発表する機会を得る。そして好運にもこの詩が一定の評価を得て、小額ながら原稿料を手にできるようになるのである。この時のペンネームは「紫薇花藕」という古めかしい名前だった。後年阿壠はこの時代のことを懐かしく去人たちに話したという。詩自体は「鴛鴦蝴蝶」の類のもので杭州の風景を歌った山水詩に過ぎなかったが、この創作活動が精神的にも物質的にも追い詰められていた阿壠に、どれだけ励ましと喜びを与えていたかはかり知れない。彼はこのわずかな原稿料収入によって、独立の生活を支えていこうとしていた。しかし父は阿壠をそんな道に歩ませたくなかった。商業方面に進ませ、家のために金儲けをさせたかったのである。やがて父と息子は決定的ないさかいを起こしてしまう。『七月』派の評論家耿庸は次のような逸話を伝えている。ある日、阿壠の言葉を尽くした説明がすべて父の厳重な叱責の前に退けられた後、彼は突然家を飛び出し近くの大きな木に上ってしまった。そして自分の希望を聞いてもらえないのなら、ここから飛びおりて死んでしまうと叫んだのである。父は息子の言い分を聞かないわけにはいかなかった。こうして脅迫じみた手段によって、阿壠は再び独立の道を歩み始めた。阿壠の情熱的で一途な性格を物語る話である。一九三〇年頃、つまり阿壠二三歳くらいの時、今までの原稿料を必死に貯めた資金を持って、彼は西も東もわからない上海に出て、上海工業専科学校に入学した。この学校の前身は南洋公学であり、阿壠は当時の青年なら当然の「工業救国」の夢を抱いていたに違いない。しかし彼はこの租界の街上海で、帝国主義列強諸国の圧倒的な強さと、中国の民族的な滅亡の危機を実感する。翌三一年、日本の侵略は新たな段階を迎え、「満州」から上海へと容赦のない戦火の拡大が進んだ。そして特に一九三二年の第一次上海事変において、上海の街の凄惨な様を目撃した阿壠は、心の底の民族意識を決定的に目覚めさせた。一方、社会不安の深化によって、阿壠のような工業学校卒業生はすべて進路を完全に断たれていた。こうして彼は、自分の進路について曾てない選択を迫られたのである。ちょうどこの

頃、国民党の南京中央軍官学校が上海で第十期生を募集していた。彼は迷わずこれに応募し、南京に渡った。この時の選択が後に彼に対する批判の基になり、彼自身も深刻な自己批判を行なっているのだが、当時の社会情勢から見れば、これは彼の民族的な情熱を証明する事件以外のなにものでもない。以後十五年間、阿壠は一時的に軍服を脱いだこともあったが、基本的には軍人の身分で複雑な環境の中を戦い続けた。

(2) の時期は、一九三七年の第二次上海事変を頂点として、阿壠が実際の戦闘に参加し、社会の実相に深く関わりながら、その特異な創作をつぎつぎと発表し、これらが文壇の注目を浴びた時期である。彼が「鴛鴦蝴蝶」を歌う「紫薇花藕」ではなく、抗日の情熱に燃えた激しい自由の詩人として、上海の文学雑誌『文学』に登場したのは、一九三五年のことだった。中央軍官学校学員S・M・というのが、その時のペンネームだった。一九三六年の上海は多くの文学論争の場であり、青年阿壠はその中で大きく成長していった。また在学の年数からもわかるように、阿壠は卒業後も学校に残っていた。阿壠は国民党の腐敗の実状を肌で感じていたが、抗日の戦いに軍人としての力を発揮する日を心待ちにしていたのである。そして一九三七年、阿壠は軍の命令により日本軍の攻撃を目前に控えた上海に少尉小隊長として派遣された。上海へ自分の小隊とともに移動し、八月十三日抗日の最初の一発を撃つまでのことは、一九三八年湖南の衡山で書かれたルポルタージュ『閘北は撃ち始めた』の中に、みごとに描かれている。しかしこの戦いで阿壠は顔面を撃たれる重傷を追い、戦線を離脱した。具体的な負傷の状況については少し食違いがあるが、頬から下顎を撃ちぬかれたらしい。後に阿壠は詩のなかで、この負傷を自己の「再生」の起点として捉えている。徹底した治療が受けられないまま彼は長沙など各地を回り、一九三八年のはじめ湖南の衡山に辿りついた。この地で前述の『閘北は撃ち始めた』をはじめ、『攻撃から防御へ』などいくつかのルポルタージュと多くの政治詩を胡風の主催する文芸雑誌『七月』に精力

的に発表した。この時期のルポルタージュは『第一撃』という名でまとめられ、海燕書店から『七月文叢』の一として出版されている。ペンネープは「亦門」だった。この時期、阿壠は胡風を通じて共産党との接触を開始したらしい。前述の日本人との関係もこの時期のことだった。第二次国共合作は一九三七年九月から開始されたが、この三八年八月には共産党系の団体に解散命令が出るなど、合作は一年ももたなかった。阿壠はこのような状況下でより強固な抗日の姿勢を持った共産党に近付いた。そして一九三九年の始め、憧れの延安に渡る。これは周恩来の政治秘書をしていた呉奚如の手引きによるものだった。陰で胡風ら作家のグループが動いていたことは言うまでもない。周恩来と胡風の関係は古く、後の雑誌『希望』出版の際の資金的な援助も周は行なっていたほどである。しかしこの延安行は全行程徒歩で国民党の制圧する地域を突破して行くという困難な旅であり、古傷を持った阿壠にとって非常に苦しい旅だった。阿壠の延安に対する憧れは、その詩や小説のはしはしに表れている。これほど共産党に憧れを持っていた彼だったが、終生共産党員にはならなかった。情熱的である一方、容易には同調しない彼の性格がここに見える。

(3) の時期は、『七月派』の文学者として名声を高めた時期であり、政治的には国民党の軍人でありながら共産党に高級情報を流しつつ複雑な戦いを展開した時期である。そして彼の人生の悲劇の始まりの時期でもあった。一九三九年、阿壠は延安で抗日軍政大学に学んだ。時間的には数か月しか延安にいられなかったが、ここで彼は共産党の軍隊の実際に接した。彼の感激は大きかったと思うが、そこで学んだもののすべてに渡って完全に納得したわけではなかった。これは後の彼の詩論などに明確に表れる。阿壠はきわめて誠実な学生で、座学はもちろんのこと、どのような軍事演習にも傷を押して参加していた。そして再び負傷するのである。この負傷についても異論があるが、演習中に草で眼球を突き刺したらしい。それにこの頃には顎から奥歯にかけての古傷もひどく化膿していた。延安での治療は無理であ

った。こうして已むを得ず彼は延安を離れ西安に向かう。またこの地に戻るつもりだったから、ほとんど身一つの移動だった。しかしこの一九三九年には国民党の共産党に対する大攻勢が始まっており、彼が延安に再び戻ることは始めから無理だったのである。しかも彼は前述の呉奚如から秘密の任務を依頼されていたという。それは国民党の軍事系統の情報を共産党に教えるということだった。この辺の記述にはやや矛盾があり、正確にはわからない。結局阿壠は延安に戻ることはなかった。そして西安で治療を受けながら、『南京』の執筆に全力を傾けたのである。一九四〇年春、阿壠は重慶に向かった。そして国民党の戦時工作幹部訓練団第四団を経て、陸軍大学に入学する。卒業後は成都の中央軍官学校の教官となった。以後、彼に対する逮捕令状の出る一九四七年五月まで四川を中心に、政治的な二面生活と創作の日々を送る。彼のスパイ活動について発表されているのは、緑原が回想のなかで語っているもの一つだけである。創作は詩を中心に行なわれ、彼の政治詩の大部分はこの時期に作られている。これらは詩集『無弦の琴』としてまとめられ、出版された。また成都においては文芸雑誌『呼吸』を出版した。散文の面では『希望、我にあり』という散文集を書き上げていたが、出版できないまま散逸してしまった。一九四四年には胡風も重慶にきており、『七月』『希望』を中心に、阿壠たちは活発な文学活動を展開し、知識層に大きな影響を与えたのである。

さて、この時期に阿壠は結婚をしていた。妻となったのは成都で知合った十六歳年下で二十歳の張瑞という女性だった。一九四三年のことである。阿壠はこの女性を心から愛していたらしいが、一九四六年にこの新妻は自殺してしまった。自殺の原因は明らかでない。彼女は阿壠に癒されぬ心の傷と七か月になる男の子を残した。その子の名は陳沛という。翌四七年五月には、阿壠のペンネームを使った反政府活動が露見し、逮捕が目前に迫った。こうして阿壠は成都を離れる決心をする。子供を亡き妻の実家に預けての傷心の旅路であった。以後、南京、上海、杭州一帯で逃亡生活を送

ることとなる。これ以後時折阿壠は張懐瑞というペンネームを使った。自殺した妻を懐う気持ちによるものであろう。こういう困難な時期にも彼の筆は鈍らなかった。特にこの時期で注目されるのは、『詩と現実』を中心とした詩論である。彼は伝統的封建的な文芸の批判の先頭に立ったばかりでなく、『白毛女』などの山歌や民族形式重視の文学に対しても鋭い批判を展開した。阿壠の詩論は、延安の文芸と国民党統治下の文学の対立を表すものである。詩人で翻訳家の羅洛は「空白といわれる四〇年代中国の詩壇を、阿壠は理論の面から埋めた」と阿壠を評している。

この理論的な深化は直接（4）の時期につながる。新中国の成立は阿壠にとって新しい戦いの開始であった。彼は政権と結び付いた文学者たちと容赦のない論争を続けた。そしてこの論争は一歩一歩阿壠を絶壁に追いつめていくのである。この時期阿壠は、『人と詩』『傾向性を論ずる』などの詩論を発表し、胡風派芸術論の論客として注目を浴びた。論争の内容についてはもはや語る余裕がないが、最終的にはこれは文学論争ではなかった。これは政治闘争として位置付けられ、最初から謀略的に敗北の予定された虚しい戦いであった。いくつかの計画的な争点を経て、阿壠らは反革命罪を着せられ、社会的に抹殺された。いわゆる「胡風批判」である。この時期彼の活動は天津を中心に進められ、逮捕されるまで天津文学工作者協者の編集部責任者だった。(5)の時期については資料がほとんどない。わかっていることは次の数点である。逮捕は一九五五年五月だった。十年後の一九六五年に正式な判決として禁固十二年が言い渡されたが、間もなく文化大革命が始まりこの判決は無効となって引き続き拘留されることとなった。この間毎年子供の写真を見ることだけは許されていて、一九六三年息子陳沛に宛てほんの数行の手紙を書くことができたが、息子は後難を恐れてそのまま手紙を獄中に返送した。一九六六年公安局から監獄病院に入院した父を見舞っても良いという通知が陳沛のもとに届いた。この時も息子は遂に見舞いに行く勇気を持てなかった。文化大革命が激化していたからである。一九六

七年三月二十一日、妻の命日の三日後、阿壠は脊髄カリエスで獄死した。こうして阿壠の無念は永久に閉ざされた。

一九八〇年「胡風反革命集団事件」は正式に撤回され、全員の名誉が回復された。しかし、この事件にまつわる話はその後もまだ正確には語り始められていない。

*

本論は阿壠についてほんの概略を述べたに過ぎない。中国現代文学において「左」の側から各種の「整風」で抹殺された文学者については、その発掘がきわめて難しい。現代文学はもともと一つの混沌であり、本来多くの花を結ぶものであるのだが、中国ではここに述べた阿壠のように優れた資質と特異な業績を持った文学者が、硬直した理念と空虚な政治運動によって、わずかな作品しか世に残せずに消え去ってしまっている。特に魯迅の死後はこの傾向が急速に進展した。またこの傾向あるが故に、すべての現代文学を等質のものに見做し、一括して否定する見方も生じている。しかし「彼ら」は確かに存在し絶望の淵に美しい花を咲かせていたのだ。この小論を以てその一つの証としたい。

なお、本論内に引用した各文献の他に、緑原著『葱と蜜』(一九八五・一二・三聯書店)、阿壠『第一撃』(一九八五・九・海峡文芸出版社再版)の耿庸による「後記」、阿壠『人、詩、現実』(一九八七・七・三聯書店)の羅洛による「序」、『胡風雑文集』(一九八七・一二・三聯書店刊)、李輝著『胡風集団冤案始末』(一九八九・二・人民日報出版社)、劉献彪主編『中国現代文学手冊』(一九八七・八・中国文聯出版公司)などを参考にさせていただいた。